
ハートのスピーカー

新田ひより

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハートのスピーカー

【Nコード】

N0991I

【作者名】

新田ひより

【あらすじ】

思ったことが何も言えない臆病な私はクラスの中で、イジメの標的だった。その様子を毎日影から見ていたクラスメイトが私に差し出したものとは……

私

私は話すことが苦手だった。
思っていることが何も言えなくて
ただ、私は一人ぼっちだった。

「田島さん、ゴミ捨てについて」
その日は私の掃除の当番ではないし
何より私は早く家に帰りたいかった。
でも、断れない・・・
それが私の性格だから。
私はとても弱いから。

「わかった。」

私がそう言うと、クラスメイトは
ゴミ袋を投げつけて
さっさと遊びに行ってしまった。
足音が聞こえなくなるのを待って
ため息をつきゴミ袋を拾うと
結び方が雑だったのか
結び目が解け、ゴミが床にちらばった。
片付けようとして、腰をかがめると
私の眼の隅に人影が映った。
またあいつだ。

同じクラスの神崎啓太。
いつもこんな風に、私がいじめられてるのを
助けるわけでもなく眺めている。
私は神崎を横目で少し睨みつけ
ゴミ袋とともに足早に教室を出た。

「ただいま。」

私はなるべく音をたてないように注意をはらい
玄関のドアをそっと開けた。

親に顔を見せることもせずに

一目散に自分の部屋に向かう。

ドアを閉めるとほっと息を吐き出し

鎖から解放されたように座り込んだ。

私には両親がいないわけではない。

ただ、何年も学校や親せきの家以外では
お互いの顔すら見ていないのだ。

両親は学校の先生や親せきの前では
いい親を演じきっていた。

しかし、家に帰ってくると途端に態度が変わり
私はいつも邪魔者だった。

ちょうど4年前。

父は自分の言いたいことをはっきりと
言葉に出来ない私に苛立ち

「お前見てるとイライラするから顔見せんな」
と言い放ったのだった。

母も父と言いたいことは同じらしく、
私の顔をちゃんと見ようとはしなかった。

それから4年もの間、

一度も会話をしていない。

気がつけば、私は高校2年生になっていた。

独

「いってきます」

返事が返ってこないのは当たり前だとわかってはいるけど一応言ってみる。

私はドアを開けた。

もう12月だということもあってかなり肌寒い。

家の前にある木の枝の隙間から

朝の陽気な木漏れ日が差し込み目を細める。

「有希ちゃん。旅行行ったんだって？」

いきなり名前を呼ばれ、私は振り返った。隣の家のおばさんだ。

旅行・・・？何の事？

ああ、お母さんがまた嘘ついたんだ。

近所ではいいお母さんだって有名だもんね。

私はにっこりとほほ笑んで

行ってもいない旅行の思い出話をするはめになった。

学校につくと、教室の中は

クリスマスや冬休みの予定など

楽しそうな話題で盛り上がっていた。

私には関係のない話だ。

自分の席に着くと小さく背中を丸め、

私は昨日テレビの特集でやっていた

ハートの形をした可愛いスピーカーを思い浮かべた。

今年はそれを自分へのプレゼントにしよう。

毎年クリスマスには、自分へのご褒美に
欲しいものを一つだけ買うというのが
私の中の決まりだった。
もちろんお年玉で。

そんなことを考えていると
誰かの視線を肩に感じた。

また、あいつだ。

神崎は、話しかけてくるわけではないのに
憐れむような目で私を見ていた。

私は自分が惨めだと思われないように

一人でも平気だという風に装った。

図書館で借りてきた文庫本を開いてみる。

内容なんて全く頭に入らなかった。

悔

クリスマスになると、大勢の人が
少し浮かれた気分で家路に着く。

ショッピングセンターの前では

おなじみのクリスマスソングが流れていて
親子やカップルの姿が目についた。

もうクリスマスか。

クリスマスを一緒に過ごすような

友達なんていないけれど

私も今日は世間一般のムードに

少し流されているのかもしれない。

私の今日の目的はただ一つ。

あのハートの可愛いスピーカーを買うこと。

私の足はまっすぐあの店に進んでいった。

「おい。」

私の気分を害したのは

意外にもあいつだった。

神崎は私を呼びとめると

どこに行くのかと尋ねた。

本当は可愛いスピーカーを買いに行くんだと

自慢してやりたかった。

でも私はその言葉をのみ込んだ。

何で話したこともないクラスメイトに

そんなことを教えなければならぬのか。

その質問には答えようとせずに

私は神崎に背を向けて走り出した。

でも神崎は追いかけてくるわけでも
待てと言ってくるわけでもなかった。
私は後ろも振り向かず走り続け
程なくして足を止め、肩で息をした。
目の前にある建物を見あげる。
大嫌いな家に帰ってきてしまった。
スニーカーを買えなかった。
でも、また神崎に会うかもしれないと思うと
お店にまで戻る勇気がない。
そんなことわかっていた。

耐

私の冬休みはいったい何だったのか。
遊ぶ友達もいなければ

これと言って趣味があるわけでもない。
とりあえず暇つぶしと思い

図書館に行っては、興味もない本をめくってみた。
目は文字を追っているが
内容が頭に入ることにはなかった。

気づけばもう始業式。

冬の寒さを感じ、肩に力が入る。

この力は必要なものだろうか。

そんなくだらない事を考えながら

私は学校への道のりを進んでいった。

やっぱり教室は暖かい。

とは言っても、人の目は冷たかった。

刺さるような視線と笑い声。

いつしか私へのいじめは

陰湿なものから、誰が見てもわかる程
大胆で悪質なものに変わっていた。

ビリビリと紙を破く音が聞こえてくる。
しばらくの沈黙の後

いっせいに紙屑が投げつけられた。

私のイスの周りだけ雪が降ったように
白く紙が散らばった。

その中の一枚を試しに開いてみる。

―死ね―

その紙は、雪なんて綺麗なものじゃなく
人を傷つける凶器だった。

開くのは一つで十分だろう。

きつと他のものもだいたいそんな感じだ。

そんな私の手をひいて走り出したのは

またしてもあいつだった。

神崎啓太。

変

「どこ行くの!？」

私が何度叫んでも神崎の足は止まらない。

それどころかスピードは上がる一方だ。

街を歩いてる人の目も、今は気にしている余裕がない。

繋いでいる手がだんだん痛くなってきたとき

やっと神崎は立ちどまった。

私たちの苦しそうな息づかいだけが

まだ朝日のキラキラしているこの街で

とても異質なものに思える。

私たちはどちらからでもなく歩いていき

ちようにどいいベンチを見つけて腰をおろした。

「お前、あのままでもいいのかよ。」

神崎はちよつと怒ったように言った。

いいとか悪いとかじゃなくて、仕方がないと

私はずっとそう思っていたし

これからその考えが変わるということとは

おそろくないだろうと思っている。

私はそのとおりの言葉を雨が降り出したときみたいに

ぽつぽつと、しかも独り言のように言った。

けれど、実際に聞こえた私の声は

「いいわけないじゃない」

というあまりにも強気であり得ない言葉をのせていた。

こんなのおかしい。

どうしたらいいのかわからずに私は自分の胸に手を持っていた。

私の手にあるはずのないものが引つかかる。

コード・・・？

私の胸にささったコードはくねくねと曲がり

神崎が大事そうに抱えているスピーカーへとつながっていた。

そしてそこから響いているのはまぎれもなく、私の声だった。

私が口を開いていないにも関わらず、そのスピーカーからは

「こんなのおかしい」

という音が私の声でそっと流れていく。

私はもう一度胸に手を持っていきコードの感触を確かめた。

コードの先をたどっていく。

神崎の手にあるのは、あの日私が買えなかった

ハートのスピーカーだった。

信

私は口を開かないのに
スピーカーはどんどん言葉を流していく。

「なんであんたがこれを持ってるの？」

「なんでスピーカーから私の声がするの？」

「私はしゃべってないのに」

そんな私の疑問たちは

神崎の手の中で増えていく一方だった。

ぽかんとしている私に

神崎は大事そうにスピーカーをなでてから
一言言った。

「俺がお前のために作ったんだ。

お前の本当の言葉がききたかった。」

心が温かくなるのがわかった。

私は理解した。

この人は知っていたんだ。

私の事をわかっていた。

私の諦めの中にある希望を、
変わりたいと願う気持ちを
全部わかっていたんだ。

「ありがとう」

言ったのはスピーカーではない。

私の意志で私の口から出た言葉だった。

すぐにいじめがなくなるわけじゃない

スピーカーを使って

いじめてくる奴らに

一言ガツンと言うことも多分しない。

このスピーカーは私が言えないことを
神崎に伝えるための道具だから。

二人でなら大丈夫。

私はそう確信した。

もうひとつわかったことがある。

私は神崎のことが
好きだ。

二人はそつと手をつなぎ

まだ朝の街を眺めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0991i/>

ハートのスピーカー

2010年12月15日03時12分発行